

豊中市制施行80周年記念事業 第8回豊中市都市デザイン賞シンポジウム

【パネルディスカッション】

- テーマ：楽しみながら見つけよう！！「好感・共感・素敵な景観」
- コーディネーター：関西学院大学名誉教授 加藤晃規氏
- パネリスト：毎日放送アナウンサー 古川圭子氏 関西大学教授 岡 絵理子氏
(株)ジャス代表取締役 加藤精一氏

古川パネリスト：引き続き、よろしく願いいたします。

岡パネリスト：関西大学の岡と申します。今日はよろしく願いいたします。

私、古川さんとどちらが先だかわかりませんが、生まれてからずっとこの豊中で暮らしております。豊中に田んぼがとても広がっていたころからずっと暮らしています。今日は皆様とこの何十年かでき上がってきました新しい豊中の町の景観のよさを共有したい、そういう時間になれたらと思っております。よろしく願いいたします。

加藤（精）パネリスト：皆さんこんにちは。ご紹介いただきました加藤と申します。

現在、私どもの事務所は、千里ニュータウンの中にございまして、北大阪で建築設計とまちづくりのコンサルタントということで仕事をさせていただいております。仕事としては集合住宅、特に団地系の基本計画から設計までを一貫してやっているとこのふうなところが特徴かと思いますが、その中のやはり景観とか環境とかが仕事上でも非常に今重要なテーマになっているところです。

自宅は実は私も豊中にございまして、皆さんのように50年住んでるわけではなくて、私はまだ15年しか住んでいないんですけど、非常にこの町を気に入っております、これからはずっと住み続けたいなというふうに思っております。

また、仕事の傍ら、大学等に非常勤で行っていたり、それから（建築士）事務所協会等でまちづくり関係のいろんな活動もしておりますので、是非このような場で皆さんと一緒にいろんなことを考えながら、今日は呼ばれた理由が設計者ということで何か話をしろということでございまして、ちょっとかたい目の話を今日はさせていただくかもしれませんがよろしく願いしたいと思っております。

加藤（晃）コーディネーター：それでは、約1時間強という短い時間ではありますが、皆様のお手元にテーマはありますでしょうか、「楽しみながら見つけよう！好感・共感・素敵な景観」というようなテーマで進めてまいりたいと思っております。

私は、ちなみに豊中市民ではありません。お三方とも豊中市民で、これはちょっと分が悪いなど感じておりますけれども、神崎川をちょっと渡った三国に住んでおりますので、いつか財産ができた

【写真上⑩、写真下⑪】



たら豊中の高級住宅地に住んでやろうと、こう思っているところでございます。

簡単に趣旨説明をさせていただきますが、【写真⑩】これは皆さんご存じの80周年、今年で豊中市は市制を引いてから80年になったということで、そのときのロゴです。皆さんお手をつないで、そこに「夢もつととよなか」というふうに書いてありますけれども、このコンセプトそのものも今日のこのシンポジウムあるいは表彰式典のコンセプトになっております。

ということで、この好感の持てる景観、共感できる景観、すてきな景観というものを楽しみながら、夢ということですから未来に向かって少し探していこうと、こういう趣旨で進めてまいります。

もう一枚ですが、【写真⑪】これは、豊中市都市景観・屋外広告物審議会のマターでもあるんですけども、豊中市都市景観形成マスタープランの中に書かれております、すてき

な景観をどうやってつくっていかうか、特に行政としてどういうふうにやっていかうかという本から抜粋したのですが、一人ひとりがいいねと思うようなものを大いに発掘しようではないか、それがある隣の人もいいね、あるいは次の世代の人もいいねというようなことになればこれは共感するんだと、そういう一連のつながりを探したり広げたりすること自体が育ちになるわけで、これは子供を育てるとかいろんな中で一般的には使われている言葉ですが、要するに景観というのは育てるものであるという、結果としてそういう素敵なものが生まれてくるはずであるという予定調和的なものですが、素敵というのはこのすばらしい「素」から来ているそうです。すばらしいもの、すぐれものでなければならぬ、そういう姿とか景色、風景、印象を探そうということでもマスタープランもでき上がっているようです。

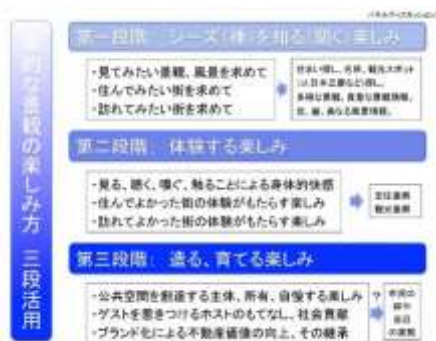
しかし、景観とは何かと言いますと、先ほど古川さんのほうからご指摘がありましたけれども、誰もが身近に参加できるそういうものであると思います。今日はそのあたりを浮き彫りにしていきたいと思います。難しいことが書いてありますけれども、デファクトスタンダード、これ情報用語なんですけど、法律で決めるものをデジュールスタンダードといい、ISOの14000とか9000など法律等々で決めていくもの、法律をフランス語でデジュールと言いますが、それに対してデファクトというのは市場が決めるといいますか皆さんが決めるといいますか、当然多様性が前提になります。

いろんなスタンダードがある、その代表がマイクロソフトのOSであるとか、ビデオでいうとVHSの市場のような、そういうものがデファクトスタンダードの代表で上げられています。実は景観もそうだと、よい景観、素敵な景観というのもそういうものでしょうという認識からスタートをすれば、古川さんや専門家も、もちろん皆さんも参加権利があると、こういうことになろうかと思えます。

最後に一言、この風景、風土という言葉と合わせて景観ということを考えていただきたいんですが、景観は10年、風景が確定するには100年、風土はこれは地形とか気候とかそういうものがかみ合ったもので出来上がるものと言われており、1,000年かかると言われています。今、法律で言いますと歴史的風土という法律がありますが、大体1,000年たって初めて評価される、それに対して景観10年というのはもう簡単につくることができる、簡単に壊れることも可能であります。

ですから、身近に皆さんがちょっと気をつければいいものを作ることもできるし、ちょっと気を抜くといいものは簡単に壊れていくという、そういうものが景観である、こういうふうに捉えてみたいと思います。

【写真⑫】



【写真⑫】最後にもう一枚、先ほどの古川さんのお話でもう全部語られておりましたが、楽しい景観、楽しく景観をつくっていかうということですので、三段活用と私は申し上げているんですけども、私はいろんなすばらしい風景とか景観を探すのに、まずシーズを探して行って、いろんな人に聞いたり物を調べたりします。その中で体験をするということが重要かと思えます。観光に行ったり、そこに具体的に近くへ寄って目で見ようということですが、さわったり聞いたりする、そういうことをすることによって得られるもの、楽しさというのがある

かと思えます。

最後に、育てるといいますか、先ほど古川さんもそうおっしゃっていましたが、実際に皆さんが主役となって公共空間を対象として、そういうところに新しいものをつくったり、あるいはいいものにかかわったり、つまり参加をすることによって自分のものになる、自慢できるものになるということです。

結果的に何を求めるのかということ、私は経済学的にはその地域なり場所がブランド化されるとい

うことであると思いますが、それによって固定資産税が上がるかもしれませんが、価値が上がると、皆さんが住んでみたいと思うような、あるいは訪れてみたいと思うような、そういう不動産や、場所になっていけること、これが景観を楽しく扱う極意ではないかと思っております。

少し冗長になりましたが、私の景観を楽しむ三段活用ということで、このシナリオに従って少しパネリストの方にご発言をいただきたいと思いますが、まず最初に皆様方に楽しい景観というものを、簡単に一言でご発言いただきたいと思います。

はじめに、古川さんからお願いします。

古川氏：先ほど2つほどお話ししましたが、交通が便利で緑が多いただけならいろいろないい町があると思うんですが、豊中にいるもう一つの理由が飛行機が見えるということなんです。

【写真⑬】

大阪国際空港 (1/3)



【写真⑬】 空港があって飛行機がいつでも見える、それに伴って騒音の問題とかありますが、やっぱり子供心にすごく近くで飛行機が見られたり、空港という、今はちょっと世界にはつながってないんですけど、当時はいろんな国につながっている場所があって、ただただその空港を見るためだけに行ったりしておりました。飛行機というのも一つ豊中の景観で欠かせないものです。こんなに近くで見られる場所は、あまりないと思いますし、よく行きました。

【写真⑭】

大阪国際空港 (2/3)



【写真⑭】 飛行機があるということと、それに伴って空港とか航空会社に勤めている人が豊中で身近に住んでいます。私の家の隣にJALのステュワーデスさんが住んでいます。毎日その人が制服を着てハイヤーがお迎えに来て乗っていく姿を見て、私もあんなふうになるんだと思って客室乗務員を目指して勉強いたしましたし、町の風景の中にその空港という存在そのものが溶け込んでいる感じが私は豊中のとても好きなところの一つでもあります。

【写真⑮】

大阪国際空港 (3/3)



【写真⑮】 夜景なんかとってもきれいですし、飛行機で帰ってくる時には必ず右の窓側をとれたらとって、降りてくるときに豊中の町がすごくよく見えますよね。特に曾根のバイキングビルがとても目印になって、あ、あの辺りが私の家だって思いながら帰ってくるのがとても好きで、そこが豊中の好きな景観の一つでもあります。

それと、【写真⑯、⑰】 もう一つ写真を用意していただいたのが、まちなみ市民賞の写真にもありましたけど、服部天神駅のご神木です。こういう形で木をちゃんとホームの中に残している、こういうところがとってもいいですし、岡町の商店街にもケヤキの木をお店の中に取り込んで、今漢方薬屋さんになったのかな、昔昆布屋さんでしたけど、ああいう自然にお店があるという、自然を大切にしながら共存していく感じもとっても豊中らしくて好きだなと思います。 なかなか、ちょっと木も苦しうかなとも思うんですけど、とても服部天神駅らしい景色ですよ、こういうところが大好きです。

コーディネーター：ありがとうございました。

服部天神駅
ご神木 (1/2)



服部天神駅
ご神木 (2/2)



【写真上⑯、写真下⑰】

引き続きまして、同じように楽しい景観ということで、加藤さんいかがですか。

加藤（精）氏：楽しいってなかなかよく考えると難しいなと実は思っていて、ちょっとエピソードになるかもしれませんが、昨年の末に建築専攻の学生さんと景観についてお話しする機会がありました。そのときに学生さんに景観をつくるといったときにどんな要素で景観ができてるんでしょうかというふうなお話をさせていただいたんですが、それは非常にストレートに言いますと例えば色と形、あるいは人工物と自然、あるいは建築物とそれにまつわる塀や垣、それと道や広場等の公共空間、それに加えましていわゆる歴史文化的な遺産、これらはよく行政では景観資源というふうに言われていると思いますが、そのようなものに新しい建物が加わっていくことで、物理的な景観はできているんですけども、もう一つ非常に大事な要素があるということをお話をいたしました、それは何かと言いますとやっぱり人なんだと思うんです。

なぜ人かということですけど、やっぱり人がそこに感じられるということが普通の風景からそれぞれの人にとっての景観というふうに変貌しまして、初めてそれでおもしろいと感じたり興味を引かれるというふうなことになるのではないかというふうなお話をさせていただいた。それがさらに自分の生活感覚といいますか思考みたいなものと共鳴すると、非常に身近に楽しく感じるのではないかというふうに思います。

もう一つ、市民の方とよくまち歩きをするのですが、そのときにいつも思うんですけど、そんなにその町をよく知ってる方ではない人たちと一緒に歩くんですが、その町並みに、例えば形成の歴史でありますとか、それから建物、山、史跡にまつわるいろんな人物、あるいはいろんな物語がまわりついておりまして、そういったふうなことをお話ししながら、それとあわせて一応建築士と歩きますので建築的な特徴とか成り立ちみたいな、そういったふうなことを少しお話をさせていただくと、市民の方はものすごく興味を示されます。そのあたりを見ておきますと、やっぱり私は「わかる」ということが、つまりその景観の成り立ちとか、かかわっている人の人となりとか、そういったふうなものがわかるということが楽しいということの源泉にあるのではないかなと思っておられます。

あともう一つは、私は実は旅行が結構好きでして、皆さんがどういう旅行をされるかわかりませんが、いわゆる旅行会社のツアーみたいなものではなく、自分で見知らぬ町をひたすら歩くということをまず第一にやることにしています。これは何がおもしろいかといいますと、仕事柄、有名建築を見に行くというのも目的の一つではあるのですが、その有名建築というよりも町の中を1人で歩いて直接空気とか気配みたいなもの、あるいはそこに暮らしておられる人の息遣いみたいなものを感じ取るというのがとてもその町がわかったような気になりまして、実際はわかってないんですけど、ついそういう気になって、その町が本当に身近に感じて、そういうことがやっぱり旅行の一つの楽しみであります。

そういったふうなことを一言で言いますと、わかる景観が楽しい景観の大もとであるというのが私の結論です。

コーディネーター：ありがとうございます。

わかる景観っていう言葉は、逆に言うとわからない景観というのがあるんだなと。そういうことが非常にわかりやすい言葉で述べられました。

割と景観とコミュニケーションされるといいますか、話し合いをされるというか、かなり思い入れのある方だなという感じがしますが、そういう楽しみ方というのがあるということが分かりました。ありがとうございました。

引き続きまして、岡さんいかがですか。

岡氏：私は、いろんな国に行くのですが、その国についたら一番初めに行くのは市場なんです。一番素敵な景観は、人がたくさんいるところ、人がたくさんいるのが市場です。その市場の様子、人がいっぱい集まっている様子というのが大好きなんです。

私は先ほどお話に出ました服部に住んでいるのですが、身近な市場といえば豊南市場です。あの市場に小さいときから行ってたんですが、今回写真を撮ってきてくださいと言われてますと、プライ

バシーのことがあるので、今は人をなるべく入れないように写真を撮らないとだめです。だからこんなふうになが一人もいない写真ばかりになって、悲しいなとは思っていますが、仕方ありません。

ですから、先ほどの古川さんが出された小さいときのお写真なんて、あの写真を見て、子供たちの顔を見ているだけで、そのときにどんな楽しい日常を暮らしていたかもわかってくるんですね。そういう人が写っている、人のいる景観というのが本当は大好きなんです。

先ほども少し加藤さんのほうからお話がありましたが、人のいたことがわかるとか、人が暮らしていることが垣間見れる、そういう景色が好きです。海外の団地を見に行くこともあるのですが、海外の団地って夕方になっても窓にカーテンを引かないんです。日本では、夕方になったらカーテンを閉めて、昔だったら雨戸を閉めてましたが、ヨーロッパの団地というのはカーテンを引かない、引いても薄いカーテンを引いて、中に人がいるのがよく見えています。テーブルの上をろうそくか何かの明かりがあるのが見えます。ヨーロッパではシーリングライト、天井についている照明器具は使いませんので、テーブルの上からほんのり明るい光が見えるんですが、そういう景色をのぞき見ながら町歩きをするのが大好きです。

だから、建築の景観アドバイザーをさせていただいていますが、例えば集合住宅の場合には、家の中の人の姿が見えたり、気配を感じることができるよう設計にしてほしい、階段を隠すのではなくて、上がったたり下がったりしている人の姿が見えるようにしてほしいという話をよくします。

そのようなわけで、私はやはり人がいる景観が好きです。

コーディネーター：ありがとうございます。

それぞれお三方の楽しいという具体的な例は違うかも知れませんが、共通するようなどころには何か人がそこに介在をしているとか、あるいは人のおいがするとか、人がいればヒストリー、歴史といったものが当然あるわけですが、そういう物語性が感じられるようなそういった場が楽しそうだというような共通項があったように思います。

そういうことで、次のご質問に変えさせていただきたいんですが、景観といえば緑とか水とか、あるいはちょっと自然的な優しさがあつたほうがいいのかというのが一般的な理解ではないかと思ひます。特に豊中市のように全域が市街化区域で都市景観が主体的なところでは、その緑とか水とか自然的なものがどういふ形で楽しさを与えてくれるのかというやうなところで、岡さんのほうからお話を伺えたらと思ひます。よろしくどうぞ。

【写真⑱】

岡氏：では【写真⑱】豊中の「緑の景観」を、少しだけご紹介したいと思ひます。

今回の賞をとつてる作品も入つています。景観は学者の間では土地利用だと言われているんです。土地利用をうまくコントロールすればいい景観が生まれると。豊中の場合も土地利用が大事ですが、そのもう一つ奥にあるのが地形なんです。そういうことも考えながら、豊中の景観をご紹介しましょう。



【写真⑲】

これは千里中央の近くにこんなところがあるんです。池ですね。豊中の景観の大事なキーワードに「池」というのがあります。もともとはため池です。農業のためのため池が今も残されていて、公園として整備されている、こういうところがいい景観として残っています。



【写真⑳】

次ですが、【写真㉑】これも緑地公園の池の景色です。池の周りをうまく公園にしています。

これは豊中市の公園ではなくて大阪府営の緑地公園ですが、池の周りが緑豊かな景色になっています。

次の【写真㉒】これも緑地公園です。緑ゆたかな公園ですね。



【写真㉑】

【写真㉒】こちらはふれあい緑地です。豊中の南部にあります。広い整備された公園の中の緑地です。これも都市計画で決められている緑地です。こういう景色も出てきました。

【写真㉓】これが豊中の2つ目の景観の特徴なんですが、川筋が何本かあります。その川筋がほぼ天井川になっているという、これも豊中の景色の一つで、景観をつくっている大きな地形の一つなんです。天竺川の下を通ってる道はありません。もう一本の高川のほうは昔から川の下を道が通るといって天井川なんですね。こちらは天竺川の周りの堤防の桜で、豊中市民はこの景色が大好きですね。桜

が咲く前にまず白いユキヤナギが咲きます。その次に桜が咲く、そのような景色が春の楽しみです。

【写真㉔】そして、3つ目の特徴です。豊中というのとはとても古い町です。阪急電鉄ができる前



【写真㉒】

から能勢街道というのがあり、街道沿いには幾つかのこういう神社があります。これは庄内神社ですが、豊中のあちこちにみられる景観で、こんもりした緑を形づくっています。

次の【写真㉕】こちらは住吉神社の参道です。「とよなか百景」になっています。手前に小さいんですが掃除している奥さんが写っています。この参道に住んでおられる方々は、「参道に落ち葉が溜まっていると気になってしまっかね」って言いながら1日に何度も掃除されています。



【写真㉓】

これは今年のお正月に撮った写真ですが、秋祭りの時期にはもっと緑豊かで、この参道をおみこしが次から次へと集まってきます。お祭りの1週間ほど前に、おみこしを持っている町内の方が棒を持ってここの参道に来られるんです。自分たちのおみこしが当たらないように、当たるところに飛び出した木をちょんちょんと切っ



【写真㉕】

かれます。そういうことをすることによって、何となくトンネルのような参道が守られています。そのことを知った時、ああ、こうやってこのトンネルが守られてたんだというのを私も再認識したわけです。

次に行きます。



【写真㉔】

【写真㉖】



【写真㉖】こちらは、今回表彰されました、人の暮らしている町並みとしての緑なんですけど、都市景観形成推進地区です。道に面して緑がたくさんみえています。これはどういうことかという、塀の外の緑を手入れする人々がまちに出てくるということで、そこにまた歩いてきたほかの方が、「きれいな花咲いていますね」とか言いながら話が始まります。そういう意味では、緑は人と人とのつながりの場にもなっています。

とよなかの緑の景観



【写真⑳】

【写真⑳】こちらは、村田マンションで先ほど表彰されました。こうやって見てみると、広いところにこのマンションが建っているように見えていますが、実はすごく細い道に面して建ってるんです。前の道路の向かい側は長屋が建っていて、そういうどちらかというところと密集市街地のところに忽然とこの緑があらわれるわけです。その値打ちというのはやはり行ってみないとわからないんですけども、新しい緑をこうやって取り込んでいただけて本当にありがたいなと思いました。

とよなかの緑の景観



【写真㉑】

【写真㉑】こちらは先ほど表彰にありました大きな木々です。建物のことが表彰されていましたが、大事なのがこの木々です。このような木々は、開発側は切りたいものなんです。昔からあった木々ではありません。日本住宅公団の団地ができた時に植えられた緑ですが、マンションに建て替えるに当たって、本当だったら切ってしまうと有効に活用したいと思うところですが、残されました。

残した開発業者も偉いのですが、これは分譲マンションなので、入居される方々は区分所有者なので、管理組合でこの木々を管理していかなければならない。そちらのほうがよく大変なんですけど、これから頑張りたいなと思っています。

とよなかの緑の景観

- ❖ 池
- ❖ 公園・緑地
- ❖ 河川堤防
- ❖ 鎮守の森
- ❖ 計画的住宅地

【写真㉒】

【写真㉒】ということで、豊中の緑の景観というのは池とか公園・緑地、河川堤防、鎮守の森、計画的住宅地というふうに書き上げましたが、池と言いながらこれはため池だったり、川と言いながら堤防のある河川であったりというふうにして、人がかかわってできたものです。そのような緑しか豊中にはありません。

ですから、今後ずっとみんなで見守って維持していかなければこの緑はきれいであり続けられないということです。

とよなかの緑の景観



【写真㉓】

【写真㉓】これも先ほど表彰していただきましたが、こういう方たちの日々の努力というのがとても大事なんです。

次、お願いします。

【写真㉔】ということで、先ほどの表紙では人の姿はなかったのですが、豊中の緑というのは人の暮らしの中で楽しみながら、そして世話をするのも楽しみながら守られていったらいいというふうに感じている次第です。

【写真㉔】

コーディネーター：ありがとうございました。

先ほどから写真に人の姿がどれだけ入ってるかなというのを見てたんですが、ほとんどありませんでした。ただ、それ以上に印象的に話されたと思うのは、全てこれが人が考えてつくったものであるという、そこに大きな物語性があり、大きな人のかかわり、においが感じられるのではないかと、しかもいいものではないかとプレゼンテーションではなかったかと思えます。ありがとうございました。

引き続きまして、今度は具体的に公共空間で景観を積極的にデザインされているお仕事にかかわっておられる加藤さんのほうから、楽しいつくり方といいますか楽しい景観についてひとつよろしくお願いします。

とよなかの緑の景観



加藤（精）氏：【写真⑳】私のほうからは、設計の際にイメージしている景観づくりの視点と、もう一つは既存の景観資源を生かした設計のポイントという、2つの表題をいただいております、それに沿ってお話をさせていただきたいと思っております。

幾つかの事例をご紹介しながらお話をさせていただきますので、そのうちのいくつかは実際に自分がかかわったものであることをご許し願いたいと思っております。

まず、1つ目の設計に際しイメージしている景観づくりの視点ということですが、私はいろいろなところでよく次の3つの視点をお話しております。

1つは変化と安定、または多様の統一、ちょっと難しい言葉なんです、具体的なモデルは、皆さんがよく目にされている世界遺産のまちなみがございますね、あれが具体的なモデルイメージです。同じような形、同じような素材を使いながらそれぞれ少しずつ変化があったり、そこにいろんな工夫が加えられたり、いろんなことで少しずつ違った変化と調和があるといったようなものです。

もう一つは、場所性ということで、その場所にふさわしいものがそこにあると、これがとても景観をつくる上では大事だろうと思っています。

それから、最後に今までいろんな話が出てますが、生活やそこに暮らす人がその風景あるいはそのシーンから感じられるというものが景観づくりの視点として大事ではなからうかと思っております。



【写真㉓】



この建物自体はそういうことですが、注目されますのはまちなみにおいてどういうふうな意味があるのだろうということ、それを考えてみたいと思っております。このまちなみ写真は、それぞれ、梅花学園の校舎側と、それから反対の住宅側から撮ってるんですが、見ていただきますように周りは統一感のある風景であり、普通の町であるというかそういう風景が広がっているところにぽつんというふうな形で円形のガラスのファサードが見えていて、これが何ともこの周りの緑とともにすがすがしい印象を与えてまちなみのいいアクセントになっているというのがこの建物の大きな価値ではなからうかと、私は思っています。



【写真㉔】

【写真㉔】次に、場所性ということですが、これはある団地の外壁の改修をしたときに色彩計画をしたものですが、既に建物はでき上がっておりますので、要素としてはもう色だけ、色をどうつけるかというテーマでやったところです。もともとは本当にグレーの普通の郊外にある団地でしたが、幹線道路に面しているということもありますので、もう少し一体性も保ちつつ余り主張はしないんだけど、それぞれの住戸や住棟の場所あるいは位置が住民の方々にも少し意識されて、かつ全体としても一体性を保ち主張しすぎない色彩計画というところでやってみたところです。ごらんのような形でやっておりますが、色の問題は非常にデリケートなところがありまして、景観でもいろいろ取り沙汰されることが多いんですが、余

【写真㉒】

設計の際にイメージしている景観づくりの視点

■変化と安定（統一）または「多様の統一」

■場所性（その場所にふさわしいものがそこにあること）

■生活やそこに暮らす人が感じられること

り強過ぎる色ではなくて、なおかつ余り無味乾燥になり過ぎないような、そういうふうな色をつくるということを考えました。

【写真35】



【写真35】。同じく場所性ということで、これは一戸建て住宅地で、私どもがやったのは全体のマスタープランとインフラの設計ということを中心にさせていただいたのですが、ここで新しく住宅を建てていただくときのデザインの誘導を何とかできないかということできいろいろやったものです。

これから宅地に住宅を建てていただくメーカーさんやビルダーさんに住宅地のイメージ、こんな住宅地をつくりましょうよというそういうイメージを共有するためのガイドラインを示した、これがそのときのガイドラインです。多分細かい

ことはわからないと思いますが、こんなものをお示ししております、それに沿って建物を計画していったらどうでしょうかという提案をしました。

【写真36】



【写真36】こちらが現在の状況です。大体700戸ぐらいの住宅地なんですが、今200戸ぐらい建てておりまして、これが現在のできつつあるまちなみというところ。具体的にはガイドラインだけではなくて、先ほどお話があったかもしれませんが地区計画、緑地協定と建築協定というものを絡めておりまして、こういったふうな協定の運営も現在お手伝いをしていっています。これだけの規模で建て売りではなくて宅地段階から協定によりつくられる住宅地というのは意外に珍しいものですから、これからどのようになっていかなかというのを楽しみにしているところです。

【写真37】



【写真37】これは、先ほど岡先生のほうからご紹介のあった東豊中クラスヒルズの西側で、同じメタセコイア並木沿いの住棟です。こちらをご紹介した趣旨は、この2つの建物は、連続して建っているんですけども、全く違った考え方で設計をされておりまして、左側の建物というのは角地にふさわしい、ある意味少し強さといいますか目立つと言ったほうが早いかもしれませんが、インパクトのある建物というふうな考え方で設計されています。

右側は全く逆で、この前にメタセコイアの並木がありまして、ここは航空制限という高さ制限がかかっておりまして高いものが建たない部分であり、このファサードにとってはメタセコイアのほうが主役なので、このメタセコイアになじむような建物をということで設計がされたものです。

大体10年ぐらいたっておりますが、そういう意味では当初の設計意図からして、かなりなじんできたかなというふうに思います。設計者が何を考えているかということ、こんなふうなことを考えながらやっているというのがご紹介したかったところです。

【写真38】



【写真38】これは、先ほど暮らす人が感じられる建物がいいですねという話もあって、岡先生からも階段室が前に出ないのというお話があったかと思うんですが、これはまさしくそのことを狙った建物でして、沿道に、普通は建物の妻壁が並ぶわけなんです、あえて階段室を並べまして、夜はこういったふうな形で光の塔というふうに仕立てたものです。

建て替える前は市街地側から見ても真っ暗闇なところでして、何の表情もないというふうな感じがありました。そのため何か少し人の気配を感じるものをそこに持つてくることに

よって、市街地部分と団地をつないでいけないかということを試みたものです。

既存の景観資源をいかした設計のポイント

■街の文脈を読み取り、反映する

■素材や要素を揃える
(何かしら共通するものを取り入れる)

■本物を残す(歴史の継承)

【写真⑳】



いって、その木漏れ日がとてもきれいな町ですが、そういったふうなものを少し設計の内容に反映してみたということです。

【写真㉑】



【写真㉑】こちらは塀に見立てた少し透け感のある金属の板を並べたところ。夜は後ろ側からライティングをいたしまして、ちょっと「まち」らしいといいますかそういう風景もつくれたのではないかなと思っております。

【写真㉒】【写真㉓】もう一つ、これも改修の例です。これは西長堀のアパートで、昔マンモスアパートと言われていた集合住宅の先駆けと言われていた建物の一つです。結構有名な集合住宅でして、これは大阪市の生きた建築ミュージアムにも選定されておりまして、そうするとこの建物そのものがある意味景観資源というふうには言えるものとなっています。

【写真㉒】



【写真㉓】

改修に当たってどういうことを考えたかといいますと、復刻とそのときには言っていたんですけど、これをキーワードにして、改修しました。かなり古い建物ですので、できた当初からいろんなものがつけ加えられたり、いろんなところが改修されたりしておりまして、色も多分当初はこんな色じゃなかったかもしれません。今は誰もわからないという建物になっておりまして、そのあたりも踏まえながら、まずはできるだけ当初のいいところを元に戻そうということをやりました。

それに加えて現代生活に必要なとされる新たなものを、そのもとのデザインとの共通項を探りつつ、つけ加えていこうと、リデザインと言ったんですが、そのようにやっております。

通常は分業されることが多いのですが、外構とかサインとか照明とかそんなふうなものも全部一体的に総合的にできましたので、そういう意味ではいろんなところに一貫したテイストがくれたのかなというふうには思っております。





【写真④】



【写真④】こちらで最後になりますが、最後にポイントとして挙げますのは本物を残すという、これは歴史の継承という意味でもありますが、これが非常に大事ななと思います。

このスライドはベルリンの壁の跡地開発でして、ご存じのようにベルリンの壁が崩壊して、たしか2年前ぐらいが25年目だったと思うんですけど、今やその崩壊の跡地が市街地の真ん中にありまして貴重な再開発地になっています。その再開発のありようが非常におもしろい

なと思います。スライドを撮ったものです。いろんな建物が当然建てられています。この中にレールが写っていると思うんですが、このレールが当時のまま残されています。こちら日本でも国鉄の跡地とかいろんな開発のレールがあるんですが、なかなか本物のレールを残してもらえないことが多いです。

やっぱりこれが本物であるというのがとても僕は大事だと思っております、これは本当にそのまま残して、そのまま上を平気で駐車場にしたりして使っている、そういう残し方をしておりますので、見に行くと、歴史は忘れないぞ、そういう市民の意思も感じまして、ある種の迫力がある風景です。そういう意味で本物を残すということがとても重要であるというふうに思っているところです。

コーディネーター：ありがとうございます。

設計者というのはこんなことを考えてやってるんだという紹介がありましたけれども、私からすればこれは極めてレベルの高い設計者の発想だと思います。

景観資源を生かしたというようなスタンスは大変尊敬するんですが、一言、言わせていただくと、イギリス人は家を建築家に頼むときにどのようにいうかということ、私の家は隣の家と同じようにつくってくれと。ところが、日本人オーナーは隣の家と違うものをつくってくれと、目立つようにつくってくれと。そういう方ばかりじゃありませんけども、ともするとそういう周りの景観資源を余り意識せずにやられるというようなことを、私はよく講義で申し上げているんですが、まさに今日のお話はそういうお話ではなかったかなと思いました。ありがとうございます。

【写真⑤】



【写真⑤】それでは、この質問で最後ですが、古川さんはお子さんがおられ、育児もされておられますので、保護者の視点で子供がどういう景観を楽しんでいるのかというようなあたりも含めてよろしくお願いします。

古川氏：うちの子供たちの好きな場所の写真を撮ってきてくださいということでしたので、まずは豊中の子ならみんな好きな服部緑地、こどもの楽園の写真を用意しました。とにかく子供は広いと

ころが好きですので、近くの公園ではもう飽きているので、休みになるとこういう目新しい公園を求めてあっちこち回ったのを覚えています。

服部緑地のいいところは、もちろんこの子供向けのところもありますし、それ以外のただただ緑が豊かなところもあればプールもあるし、何でもそろっているところなんですけど、一番親として安心できるのは、こうやって遊ばせていて、ちょっと勢い余ってどこかへ出ていってもすぐに交通量の多い道路があるとかということがなくて安心して遊ばせられるということだったなと思います。

同じように子供がとっても好きだったのが、豊島体育館あたりからずっと南に広がっているふれあい緑地だったんです。あそこに見える長い滑り台がすごく好きで、もう本当に日曜日になる

とここに連れて行かされました。たしか、上から見ると飛行機の形になっている遊具だったんじゃないかなと思うんですけど、下に緑が引いてありますし、子供たちが本当に思い切り体を動かせるようなスペースがあって、ここが大好きでした。

この子供のスペースとはまた別に、ただただ広い緑地のスペースもありまして、子供は遊具のあるところも好きですけど、自由度の高いところはそれはそれでいろんな遊びを考えて一日中走り回ってましたので、こういうこけても大丈夫なような安心な広い公園が幾つもあるというのは本当に助かりました。

保護者の視点からということですので、一つ今思っていることがありまして、それは今ずっと住宅の話が出てたんですけど、学校のことももうちょっと考えてもいいんじゃないかなということなんです。上を走る電車から見てますと、豊中の五中も建てかわりましたし一中の建てかえも終わりました。でも、やっぱりどうしても学校って同じような感じのデザインになりますよね。できれば、もうちょっと豊中らしさとかその町らしさがあふれるような学校づくりってできないものかなというのをちょっと感じます。

というのも、私大学は神戸女学院に行ったんですが、神戸女学院はヴォーリズという建築家が設計をして、少女たちが10代後半を過ごすのにふさわしい場所ということで、とてもいろんな仕掛けとか思いを込めてつくってくれた学校なんです。見た目もとっても美しいですし、校舎の中に入るとちょっとしたおしゃべりができるスペースがあったりとか、図書館の天井がとってもきれいな花柄だったりとか、そういうことまで考えて学校づくりがされているんです。

おとし、国の重要文化財に指定されまして、なかなか手を入れることができなくなって学校は大変だっておっしゃってましたけど、そういうことがあるとますます卒業生たちも学校に対する愛が増すんです。ですので、豊中市という公共のところでは予算の面でも大変だとは思いますが、子供たちが長い時間を過ごす学校という場所をもうちょっと景観の面とかについても考えていただけたらと思います。学校というのは子供たちだけではなくて周りの地域の皆さんにとっても大事な場所でもあり、今後また老朽化で建て替えも進んでいくと思うので、学校の建物自体もそうですし、学校の中にちょっと地域の人たちが一緒に何かできるようなスペースを設けてもらうとかそういうことも考えていただけると、より豊中が好きになるんじゃないかなという気がいたします。

コーディネーター：ありがとうございます。

特に教育機関の景観というのは非常に重要だなという指摘であったかと思いますが、私も全く同感です。

これも一言、言わせてもらいますが、僕はイタリアが大好きな人間でございまして、イタリア人とよくしゃべるんですけども、イタリアはどのようにしてデザイン大国になったんですかというふうに聞くと、ばかにしたようにおまえはあほかと、私たちは学校に行く途中にずっとローマ時代の建築や中世ルネサンスの建築がありますと、それからバロックもあって、それがずっと残っていると。世界的な文化遺産ばかりだと、そういうところを歩いて毎日学校に行って帰ってくる。

通り自体がキャンパスだと、もうこれほどすばらしい景観はないんだという、だから優秀なデザイナーなり芸術家が生まれるんだよというふうに笑われましたけれども、今の教育機関の学校の建築は、確かにおっしゃるように予算をこれからどんどんかけていただければということですね。

古川氏：是非。

コーディネーター：建て替えないといけない学校は、どんどん増えてきますからね。

古川氏：そんなに何かかけなくても、学校ごとの特徴がもっとあってもいいのではと。割と画一的なイメージなので、何かその地域性に合わせてちょっとした特徴を入れるだけでも大分皆さんの学校に対する愛情が変わってくるんじゃないかなと思います。

コーディネーター：子供もいい情操で育つと。

古川氏：そうですね。

コーディネーター：ありがとうございます。

ということで、楽しい景観づくりについて、短い時間でございましたけれどもご発言いただきま

した。

それぞれ多様な楽しさみたいなのがあるかと思いますが、時間がそろそろ来ておりますので、最後にお三方それぞれにこれからの豊中に、未来に向かってどのようなことを期待するのか、ご発言いただければと思います。

それでは、岡さんからお願いします。

岡氏：先ほどからお話にありましたように、景観というのはやはり人がつくるものですので、人がつくったものの集まりで豊中の景観ができています。豊中の景観が良くなるには、豊中市民が幼いときからいいものを見て育て、そして目を肥やさないといけないと思います。そのためには、やはり皆さんまちに出ていただきたい、外を歩いてほしい。

子供のときにはあちこちの公園とか行ったりしていろんなものを見るのですが、だんだん大人になってくるとうろろろすることが少なくなってきて、いつも通ってる道しか歩かなくなる。自分のまちのチェックなんてしなくなるんです。広い公園の中には座るところが結構あり、なかなかまちの中にじっと座って周りを見渡せるような場所ってないですね。この会場も、屋外カフェができればいいなあと思っていましたが、屋外にカフェはありません。皆さん、豊中市民の方々にはできるだけいっぱい外へ出てまちの中を歩いていただいて、いろんなまちを見てチェックしていただきたい。

このまちが好きとか、あ、ここはちょっとまずいなとか思いながら暮らすというのも目を肥やす一つです。そして豊中市には、小さな公園でも道路でもいいので、人がそこを居場所にできるようなそのような使い方をどんどん許していただいて、人のいる景色をつくっていただきたいと思います、そうすると、豊中の景観がさらによくなると思います。

コーディネーター：ありがとうございました。

続きまして、加藤さんいかがでしょうか。

加藤（精）氏：冒頭に加藤先生のお話の中で、景観はデファクトスタンダードであるというお話があったんですけど、景観にとってのデファクトって何だろうということになると、実はこれは市民の皆さんだと思えます。やっぱり市民の皆さんの意識がその町の景観なり風景なり、もっと言うと魅力なり住みやすさなりを決めるという意識がとても大事じゃないかなと。市民がつくるものがその市の景観であるというふうなことだと思っています。

その意味で、今回初めて設けられたとお聞きしてはいますが、まちなみ市民賞というのはとても意義ある試みだと僕は思っております。どういうところがよいかというと、これを見せていただくと市民の皆さんが、普段どのように市に魅力を感じておられるのかというのが本当によくわかります。そういったふうなもの、実際に建物を所有して建てる方の意識とが、本当に合ってるかということをよく考えて、いわゆるこういったふうなものがまちにあらわれていくときに、我々の中で言うデザイン性の高い建物がすごく魅力的な景観になるとは限らないというところをよく認識していただくということが大事じゃないかなと思います。

そこに人の営みを感じられるということも大きな特徴と申し、出された写真はそういう人の営みと、それから時間であったりあるいは季節の移り変わりであったり、そのほかのいろんな人とのかかわりが鮮やかに反映されたり切り取られたりしているものがとても多かったのではないかなと思いました。

景観というのはさまざまな要素の総合で当然できておりますので、そういう意味では個々のものの良し悪しよりも、その個々のものとその周りのものとか、あるいはそこにかかわっている人の関わり方といいますか、そんなふうなものがより大事な場面が結構あると思っています。そういうことを改めて教えられたというふうに思っております。

ですから、そういう意味では専門家のつくるものに対して、もっと市民の方の目線でいろんな評価をしたりいろんなものを言っていただくということがあってしかるべきと思いますが、一言つけ加えるならば、その言い方と表現方法を是非身につけていただきたいといいますが、やたらめったら言ってみても平行線になるばかりで何も前に進まないということがありますので、その一つのや

り方としては我々が思っているいい景観ってこんな感じなんですよというのをもっと共通点を持って発信していく、そういうふうなことが大事だと思います。今回のまちなみ市民賞のような形でまちの魅力を発見して、それを写真という形であるのか、あともう一つ同じ展示の場所に豊中界限というちょっと懐かしいスケッチが展示されておりますけど、ああいう形でもいいと思うんです。

ああいったふうなものを出して行って、その中の共感を得ていくという、そういうプロセスがとても大事で、そういうものの積み重ねがある意味市民感覚に育っていくということがとても期待するところではないかなというふうに思っています。いい景観というのはすぐれた市民感覚のたまものだと思いますので、こういったふうな市民感覚が育っていくことが豊中の景観をより魅力的にするものだというふうに思って、非常にこれからの豊中に希望を持って見ていきたいなと思っております。

コーディネーター：希望はありますか。

加藤（精）氏：希望はあると思います。とても住宅地としてはいい町になりつつあるなと僕は思っております。

コーディネーター：ありがとうございます。プロの目からご意見をいただきました。

それでは最後に、古川さんお願いします。

古川氏：そうですね、一番専門外の私が最後というのはとっても荷が重いんですが、とにかく本当に何の知識もなくここに来まして、先生方のお話を聞いて、景観というとても余裕がある方々が特別な場所で作りに上げていくものかなと思っていたんですが、いや、今自分が住んでいるこのまちのことなんだということがまずわかったのがとてもよかったですし、岡さんも加藤さんもおっしゃったようにそこには人がいるという、その人というのは自分なんだというのがわかったことが今日とても大きな収穫でした。

今の豊中から何か変えてほしいかという、私はあまりそうとは思ってなくって、古いまちなみ、古いおうちもあれば新しいところもあれば、また古いところを残しながら新しいまちができていくこの感じがとっても好きで、このままであってほしいなと思うんですが、このままであるというのがいかに難しいかというのを今日感じまして、最初に岡町の商店街のアーケードの話をしたけど、やはりもう40年もたつてくるとかなり古くなってきますし、商店街のお店もいろいろ入れかわりました。やはりまちをそのままに維持するというのはコストもかかりますし、人が動かなければできないことだというのは、それはやっぱり人任せにしていたのではダメなのだなというのが今日わかりました。

大曾公園の桜やイチョウが好きだと言いましたけども、あれも全部冬になると葉っぱが落ちて道は大変なことになっていまして、自治会の皆さんがお掃除の日を決めて掃除されているのは知っていましたが、なかなか参加していませんでした。そういうことから、自分のできることから一歩参加するとか、もっと言うと自分の家を、さっき岡さんの写真で新千里南町のまちなみがありましたけど、やっぱり自分の家の前に一個きれいなお花を植えた植木鉢を置くことも一つできることかなとも思いますし、今日から意識を変えて、自分も景観に対して何かできることがあるという意識をとりあえず持ちたいなと思いました。

コーディネーター：ありがとうございました。

最後、意識を変えてという話になりましたけども、往々にするとそういう話になって明日もう忘れていくという、そういうことはないと思いますが、非常に私にとってはこの1時間ちょっと、楽しいシンポジウムでございました。いろんな方のご意見をいただいて、景観というのがまだまだ豊中では冷蔵庫に入った風景とか景観ではなくて、それをもっと将来的に解凍して、新しく価値をつけ加えられるというようなふうに少し思ったのは私だけでしょうか。

まだまだやる事が幾らでもあるというような、まず多様性といいますかいろんな視点からの楽しさを含めた景観づくりがありそうだということを提供していただいたように思います。

それから、豊中まちなみ市民賞で幾つか上げられておられますが、その中にもきめ細かく見ていくと岡さんのほうからご指摘があったような豊中の地形・地質というものが、ある種の豊中らしさ

をもたらす資源になり得るといふようなことを感じることはできないのではないのでしょうか。

また、加藤さんのほうからはあなたが主役だと、つまり皆さま方が主体的に景観資源を使った創造なり育てですね、この場合は一般市民の方はクリエイションとまではいかないまでも育てるといふ、温かく見守るといふか、壊れないように、壊れるのを少し支えていくような、そういうすてきな景観づくりというものもあったように思います。

最後に、古川さんには申しわけありませんでした。いろいろ言わせていただきましたけれども、一般の市民の目線からの非常にわかりやすいご指摘をいただいたように思います。

つまるところ、将来は希望があると加藤さんのほうから、作り手のほうからおっしゃられましたので、それを大事に皆様方も豊中の未来に向けて新しい景観、そして古い景観の価値アップに主体的にかかわっていただくと、都市景観・屋外広告物審議会が主催しております豊中のマスタープランの具体的な進展にも大いに寄与するのではないかという気がいたしまして、お願いする次第でございます。

これでいただいた時間がちょうど終わりましたので、会場のほうからも若干の発言をいただこうかとも思ってたんですが、時間の関係でこれにて終了させていただきます。

どうもご清聴ありがとうございました。それから、パネリストの方々、どうもありがとうございました。